『純正哲学自解』（M26 年）

タイトル	『純正哲学自解』（M26 年）
著者名	能海　寛（能海航雲記遺稿）
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 23 号
ページ	28－52
発行年	2018.3.15
E-mail	sekihou@hazaway.com（能海寛研究会）

ISSN 1883－4183

中国僧姿の能海寛

能海　寛　略歴

能海寛　法名法流。　石峰と号す。明治元年５月１８日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）浄蓮寺に生まれる。１２歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあっては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大蔵経の経典を求め英訳経典世に出す目的で当時鎖国中であったチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の３４年の生涯に「般若心経」西蔵文直訳（梵・蔵・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

純正哲学自解

東京にて　　能海航雲記
(M26.2.4 ～ 4.29 記述)

第一　定義

哲学は定義を施すこと最も難し。何となれば、哲学は何を以て、其目的となすか未だ明知することを得ず。況んや、定義をや。他の諸科学に於ても、全科の終りに至らずは、其定義を下すこと難し。然れとも、其各科学の目的は判然として明了なれば、又定義を下すに至りても容易なるが如し。即ち動物学は、如何に其類紛雑なるにもせよ。又動植の下等なるものに至りて、或は判別し難きものあるにもせよ、植物、金石、天文等と大体に於いては判然区別することを得、従って定義を下すに於いても易なるが如し。之れに反し、哲学は明白なる起点を基礎として考究にかかりし、容易にして、其決論に帰達することを得ば、定義も下し易きも、大いに然らずして、古来、何千年の久しき。未だ、其決論に達することを得ず。甲の真は乙の非となるあり。昨の真は、今の偽となり。又彼所の真此所の偽なるありて、時、所、人によりて、各々説を異にし、容易に一定不変の真理を発見するを得ず。又論決する所、果たして真理なるか。或は不真理なるか。更に、其目的すら一定せず。

或は目的も到底見出すことを得ずして論決することを得られざるものなるやも計られず。然らば、何故にかかる目的もなき哲学如きもの生じたるやと云うに、是全く人間の好事心より生じたるものなりと云うより外なし。此好事心は殆んど人間固有の特性なり。此好事心の起る有様は智力的懐疑の思想より生じたるものなり。故に、予は哲学の定義に於いては古来、先輩などの説の如き哲学は絶待の学なり。又は原理の原理を研究する学なりとか諸学統合の学なりとか云へる等の諸説とは大に異なり。只哲学なるものが、今日まで進み来れる状に就き、又将来も目的あって、これを発見し、之れに、論到することを得ば、其時まで、若し論決の期なきときは、未来際を尽し哲学の、あらん限り目的まで、論決する迄に呈すべき有様を推測し哲学は智力的懐疑の学なりと云はんとす。

予が、爰に謂う、哲学とは純正哲学を意味するものにして宇宙とは何ぞや。物心とは何ぞや等の問題に就て、論ずる如き哲学を意味し、心理、論理、倫理等の哲学の意にあらず。

哲学の範囲及他学との関係の如きは、哲学に少しく志あり。又は普通の哲学書などに就て、見るものは了得する所なり。又哲学の利害の如きも少しく考ふときは、了解せらるるものなれば哲学に就ての餘論は悉く、之を略す可知可考。

第二　　考究法

哲学を考究せんと欲せば、先ず、其考究法を定めざるべからず。唯想像、空想に任して推究するときは哲学の価値なきものなり。故に哲学を研究せんとするには極めて確実なる事よりして、始めざるべからず。然れば、何に拠るべきかと云うに二法あり。曰く、帰納法曰く、演繹法なりとす。

哲学考究上に帰納法必要なるは帰納法の必要なるは、哲学は更に目的として見とむべきなく、終極の論決に達し得べきものなるや否やも、判知することを得ざるが如き。空々漠々たる此無限不可思議の宇宙に居て、先ず、吾人の自らが身心を始め我足の践み場、即ち、我に最も近きものを基礎として、漸々に歩を進め、遂に、此宇宙とは何ぞやとの問題を解答せんと試るものなれば、哲学の将来は実に闇黒世界なり。然れば、此闇黒世界に進入す

るには、我足を保つ所の践場より精密に研究し始めざるべからず。語を換へて、之れを云へば、帰納法に拠て、考究せざるべからず。

次に、其帰納法に拠て得たる真理、即ち命題をば、其命題の許す限り含蓄する丈けの真理をば充分に適要し推理せざるべからず。即ち、他語にて云へば、帰納法に由て得たる命題を以て、演繹的、断定推理をなさざるべからず。これ演繹法の哲学考究上に必要なる所以なり。

第三　知識論

巳上、二段に於いて、哲学の定義及び其考究法を略論せしが柳如。是判断を下せるは何に由て、之を定めたるか、哲学の起点、己に独断なるにあらずや。然り故に、予は、更に改めて真正哲学の基点を以て、此知識論上に置かんとす。何となれば、一切萬物知識に基いせざるものなり。特に智力的懐疑は知識論の外ならざればなり。左に述べる所に就いて其理由を知れ。

デカルト氏は、一切萬物、疑はんと欲せば、疑はれざるものなく、又固より、疑はしきものなり。然れども疑、夫れ自身はいかに疑わんと欲するも、得べからざれば、故に疑はありと。是れ、実に宇宙を我れに、最も近く引寄せたるものなり。故に、予は、懐疑は哲学の根本なりと云はんとす。而して、疑とは何ぞや。我の現象に外ならず。是れ、我の研究を必要なりとす。

我とは何ぞや。知識是なり。然れば、知識とは果たして何ものなりや。

知識とは経験に外ならず。カント氏は知識に就て、先天の事件と後天の事件とを述べられたり。予は仮令、其先天の事状真に有るにもせよ、実験上に於いて、目撃することを得ざれば、其先天の事状は、此位置、此程度に於いては承認することを得ず。予は、過去も真にありしか。未来も真にあるか因果と云うことも真なりや否も、我今、此哲学を考究せんとする起点に於いては承認することを得ず。唯許すものは現在と、及び目前の彼我のみなり。

ヒューム氏は、悟性論に於いて、人間の智識を精密に議論して経験、実験に帰せり。実に間然する所なしゆえに、其一編の論は、予が哲学考究の基礎とし疑はざる所にして、知識は全く経験に外ならざることを断定す。

尓れば、実験、試験、経験、観察に由て、得たる知識は、之れを疑はず、是より帰納、演繹の推理に任じて、哲学とは果して何ものなるか。宇宙とは何なるか。闇黒世界に進入せんとす。

故に哲学は納帰法を離れて別になり。又演繹法も帰納法中のものにして、此外にあるものにあらず。従って、帰納法の極点に達したる時は哲学の極度に達したる時なり。

巳上の三段を略言せば、哲学は、将来も闇黒の世界に向て、智力的、懐疑を以て進み知識は経験、観察に外ならざれば帰納法を以て、之れを考究し、演繹法に於いて、之れを明にす。尓れば、是より以後、実際に帰納、演繹を適要し、実際に推理、実験の境遇に入り哲学、懐疑の闇黒世界を破らんとす。

第四　物心論

最も確実なる我とは何ぞや。曰く、身と心とより成る身とは骨肉、皮膚よりなり。脳髄、五臓等の器管よりなる有形物なり。心とは極狭き意の軽き意にして云うものにて、即ち、此肉体に沿うて起こる諸作用を云う。即ち、我は物心の二よりなるものなり。

此物心の二の眼鏡を以て、宇宙を詠むるゆへ、宇宙も、又物心の二より成る所。謂る山川、地海を始め全地球、諸惑星、諸恒星の体は物なり。有形なり。又真理なると否やは暫らくおき、因果の理法、引力、勢力等の如きは、即ち心なり。

故に人間は小宇宙なり。宇宙は人間の大なるものなり。尓れば、宇宙を分析して、其物に属する部分は人の物中におさまり、真理法などに関する部分は人の心中におさまる例せば、色声、香味、形体の如きは人間の眼、耳、鼻、舌、身等におさまり推理、又は心性作用中には宇宙の理法、ことごとくおさまるなり。其証は五感を去り、心を去りて考へよ。宇宙の物心、更に知ることを得ず。つまり知識外の宇宙を知ることを得ざればなり。然れども、知識のみあらば、宇宙なくとも宇宙を知ることを得るやと云うに加様には考ふことを得ず。つまり主観、客観相まちて、始めて世界は存在するものなり。物か心におさまるか、心か物におさまるか。唯物、論唯、心論互いに争うと雖判定し難し。物がよりて、人身肉体を作れば人の作用をなすゆへに、唯物なりと論し、又知識外に物ありと云うことは考へられず。知識に由て、始めて物のあることを知るなれば、唯心なりと論ずるもつまり五分五分にして物心両立論を以て、真正なりとす。

第五　唯理論(標準論)又は(達理論)

物心両立することを論せり。柳も何に由りて、此論証を得るや必ず、其標準とし、拠る所なくんば、あるべからず。物のありと論ずるも、心の有りと論するも、唯有りと云うのみにては、其真偽判断し難し。尓れば、之れは有り、之れはなしと論じて、人々の之れを道理として、之れに、同意するは全く同意せしむるの標準、即ち、理の存するありて、然るものなり。然れば、物心の存するは此理ありと云うことを共に許したる上の論なり。共に、此理と云う標準を許したる上の説なり。如論及して、見れば哲学の起点は知識論の経験なるも、段々推究するに従て、未来の真理を確定し明白なるに至る。怡も建築するに於て、基礎を確定し、漸々と構造し上るが如く、成就して見れば、爰に始めて全体を知ることを得るなり。然れども、理さえあれば萬物皆明了なるかと云うに、固より理を標準とし、之に由て、真偽、判然すれども理の外に物心なしと考ふることを得ず。然れば物心は理に拠て存すれども、理のみにして物心なしと云うべからず。故に物心理共に存するものなりと断定す。

第六　融通論

己上の如く、段々に帰納演繹的に推理、論定し行くに、最早円融の極に達せんとす。此上に歩を進むるときは、哲学の循環小数にして、無限の循環をなし転展して、遂に、極をしらず。其理由は、前段に断定せる理とは何ぞや。是は、第三章に、ヒューム氏の説を借りて経験より得たる結果なりと論定せるものに外ならず。尓れば、此所にて、充分の円融を試みは無導自在にして車輪の端なり。無限に循環するが如し。例せば、哲学とは帰納法に外ならず。又智力的懐疑なり。智力的懐疑は哲学の根元なり。又知識は哲学の基礎なり。

知識は経験なり。経験は唯物なり。唯物も唯心と同格のものなり。知識を離れて物あることを知らざればなり。唯物と論せらるると同時に唯心なり。唯心と論せらるると同時に唯物なり。物心両立して可なり。物心両立を論するは、全く理と云う標準に拠るに外ならず。唯理とも論することを得、尓れも、又夫れと同時に唯物心とも論することを得、尓るに、之れらの論の基礎を尋ぬれば理と云い、物心と云い、皆経験より得たるものなり。己上、如此論を循環すれば、更に際限なし如。此論じ来りて見れば、唯帰納論と云うも唯智

力的懐疑と云うも唯知識と論するも、唯経験と論するも、唯物と考ふるも、唯心と考ふるも、唯理と論するも、更に障碍なく自由自在なり。爰に至りて、始め智力的懐疑に起こりて円融に進んで見れば己上哲学の考究は一夢の如し。己上の諸論の中に唯感覚論なり。唯直覚論(但し唯感覚したる一時に就て論するもの)等細論せば、長々しくなるべきも、つまり大体に於いては、己上に於いて哲学の極度迄論じ尽せるものと考ふるなり。

餘論之を略す。他日完全に修正するの期あるべし以上。

道 義 学

第一　知道(定義)

純正哲学は結極可もなく不可もなき、人間好事心を満足せしむる一種の学に過ぎず。今は爰に、世界に有益なる実学たらしむるには、純正哲学の位置を変じて道義学たらしむるにあり。

抑道義学とは直に道徳倫理の学の如く考えらるるも、夫れよりも廣き意味にして、墺言せば実利的、純正哲学の意なり。実利的とは前編の純正哲学は先にも論するが如く、可も不可もなき。殆んど空論に過ぎざれば、斯の如くに、理論一遍に偏せず。宇宙、自然の道理を能く実際的に研究して、人事日常のことに応用し人界をして完全、最良の域に達せしむるの学たらしむ。これ道義学なり。

宇宙、自然の道理は物理上、化学上、人事上、萬事の上に見はりて日夜、実践すべきものなり。尓るに、其道中特に吾等人類の従うべき道は人倫の通なり。尓れば、道理は宇宙に互りて実に廣く行はるれども、人類にとりては人道を以て、主眼とし、他の諸道理を心得るも結極、人道を全ふするにあり。これ実利的純正哲学なり。

真実の知は道にあり。人間に学問の必要あるは、宇宙は廣大にして学ばずして、容易に其道理しらるべきのにあらざればこそ、其必要も起る徒に名誉の為、人並の為めに学問はなすべきものにあらず。道を知るは、道を行うが為めなり。尓れば、道にして完全に行うことを得ば、学問の必要もなきなり。何の為に徒に苦学をなすや。只此道を楽にて道を知り、即ち、行うを肝要とす。真の理は実行なり。実利なり。更に間然する所なきものなり。知とは何ぞや。学問とは何ぞや。道義を知るにあり。道義を学ぶにありと云うべし。ここに於て、真正に純正哲学の実益を顕したるものなり。

第二　教育(方法)

教育とは何ぞや。廣く云へば宇宙の道理を人類に知らしめ行はしむるの方法なり。又極適接に云へば人倫、道徳の知及行を人心中に開発せしむるの術なり。尓れば、人間は何をなすべきかを知り人たるの行いをなさしむる学問なり。故に、宇宙、自然を研究して人為的ならず教へらるると云うよりも自脩の法に由らざるべからず。中庸に天命之謂性卒性之謂道修道之教とありて、天之命に卒うを道と云う。其道をば、人為の私しなく修むるを教と云うなり。教育にして道徳を得ず。知行することを得ざれば真の教育にあらず。徒に疑智猾智のみ増すは悪の根元なり。固より道徳、倫理の学のみ。教育にあらざるも、主眼ここにあれば、此主眼にして欠んか人形造りて眼を入れざるが如し。又道徳学は諸学の大根本なり。人間たらしむるか。教育の目的なれば、人間たるに主宰となりて働く心を脩むることの必要生ず。即ち、練心と云うこと。これ又教育の一大要点なり。之れに就ては、後段に譲る。

第三　心論

道を学ぶことは、心を脩むることなり。心の欲する所心の向う所に身体は左右せらるる

ものなれば、心を練り心の堅固不動を要す。これには、心の現象などに就て、よく研究し感覚の為、肉欲の為に制せられざらんことを期せざるべからず。

宗教学 The Science of Religion.

第一章　宗教学定義

宗教の定義は後に譲り、今宗教学の定義を説明せんに、一言にして、之れを謂へば、宗教の科学なり。宗教の科学とは、先ず宗教哲学と異ることを論すべし。宗教哲学とは、実に史前の古代より宗教なるものは存しおれども、之れを、一種の学科として、考究するに至りたるは、近頃のことにして、未だ一定せず。西洋各国にもきけよ。宗教学の書として完全のものあらず。由て、予は、予の異見に従い、又西洋書などより、其財料をかりて考究するものなり。(Tbe Philosopby of Religion)宗教学の一部にして、宗教上に説く神の本体、凡神説にせよ有神説にせよ、神の性質、宇宙の解釈等の純正哲学(metaphieic)上の議論におり、是直に宗教学と云うべからず。何となれば、宗教学は宗教が人類間に存して、如何なる性質を有し、如何なる行為をなし、如何なる結果を与へたるか、及其発達等を論ずる理学にして、理学(Natural philosophy or Natural Histry or Natural Science)の一なり。略言すれば、人類界にある宗教とは、如何様なるものなるかを考究する学なり。審には、全部を通貫して後に知るべきなり。

第二章　他学との関係

第一に他学と直接の関係ある学科に就て論ぜんに。

①　宗教と哲学の関係　　宗教哲学及純正哲学を見よ
②倫理学との関係　　倫理書を見よ、其史を見よ
③心理学　　心理書くを見よ
④論理学
⑤教育学　　教育書及教育史を見よ
⑥社界学　　第八章、第九章、第十章の社界学を見よ
⑦政治学　　政治学を見よ
⑧歴史学　　歴史を見よ
⑨人類学　　人類学書を見よ
⑩地理学　　地理学を見よ
⑪人種学　　人種書を見よ
⑫審美学　　美学を見よ
⑬文学　　文学書類を見よ
⑭法理学　　進化学　　原理を見よ
⑮医学　　妖怪学
⑯工学
⑰言語学(等)　　博言学を見よ

第二　関接の関係あるもの

①地質学
②経済学　　道徳及宗教学との関係を見よ
③動物学
④植物学
⑤金石学

⑥天文学
⑦物理学　　大に理論あり
⑧化学
⑨武学
⑩数学(等)

第三章　宗教学の考究法分類　分析的、総合的

第一　宗教種類学　人種学、地学、史学、宗教学、分類学
第二　古代宗教学　人類学、人種学、史学
第三　近代宗教学　歴史
第四　比較宗教学　博言学、文学、宗教分義学
第五　宗教進化学　理想、信仰、道徳
第六　宗教哲学(又は理論的)　定義、理論的宗教学、純正哲学、心理学、審美、理想
第七　実際的宗教学　法律、政治、社界、教育、本山、儀式
第八　宗教道徳等　倫理、道徳
第九　信仰論　信仰
第十　餘論及体論　第一宗教の要素萬国開教
第十一　組織宗教学

第四章　宗教の定義

宗教の定義容易に下し難し。古来学者の説、一定せず。其2、3の例を挙しに

カントは、宗教とは神の命として、道徳の規律を吾人自身に教示するものなり。

又或学者は、或感情の、或性急なる有様なり云いしむ。又は宇宙の顕示によりて、起る礼拝なりと。又は一個人を持つ為、理想を有する為、礼拝の目的を有する為になすもの、これ宗教なりと。

由て、此最后の論者と宗教と非宗教を区別し、非宗教とは、礼拝なき生活、満足の欠乏、情欲の制なき、愛情なき冷淡、無情のものなりと。

予は、宗教とは、己が理想を情感的、信仰によりて、満足、安心して、其行為、道徳となるものなりと云はんとす。これらの細論は宗教の要素のものに於いて、明にすべく、又ここに、一言すべきは道徳とは人々、時々、折々に於て、ことなることあれば、社界一般の道徳とは場合に由りては、差異する点なきにしもあらざれば、一般の道徳を以て、直には之を論することを得ず。

第五章

①祭政一致論　政教一致
②国教論
③政教分離論
④宗教非宗教　宗教地図
⑤宇宙神教
⑥惟一神教　有神教
⑦凡神教
⑧無神教
⑨国民教
⑩普及教
⑪楽天教

⑫厭世教
⑬心論　不滅論　転生論　因果論
⑭信心　安心　定義
⑮祖先教
「有賀斯氏の『宗教近代論』は西洋耶教の近代論となる。未だ、東西洋、皆兼備せざる如し」

第六章　　宗教応用論目録

①実業策
②探見考究
③改革案
④政教論
⑤本山政論

第七章　　宗教種類第一埃及教(古代)

古代埃及人は、ハミチッリ人にして、紀元前二千七百年頃より(或は今日より八千年と)此人種の記事始まりて、此国の教は、第一、祭政一致にして、種族を三種に分かち、僧其第一位に位して、宗教のことのみならず、政治、学問、医術などのことをもつかさどり、其教、教理は霊魂の不滅、無形の神の存在を見とめたり。而して、神には、年中三百六十五日々の神ありて、僧及学者などは其偶像をば、只無形の神を記号上に顕したるものと考へ、無学のものに至りては、之を以て、礼拝の本尊と信ず。多神中 Osivis 又 Isis の神の如きは最も、より伝播せりたりと云う。而して、其奇なるは禽獣を拝することなり。犬獏イビス(鶴の類)鷹の如きは、全国中に於いて尊敬せられ、他の動物も、又所々に於いて拝せらる。特に、牝牛又金牛 apis ＆ar menphis 又犢 mnevis or Helipolis を尊び、如何、神聖なる動物は寺院に祭置し、大切に扱い、もし死すときは、之をミイラにして保存す。もし、此らの動物を殺すことあるときは故意になすと無意、なすとを論せず。直ちに死刑に処せらる。又此国は一般にミイラにすること流行して、人の死体を保存す。これ宗教上、末日審判とて幾萬年の末に、此界の終るとき動出てて、これらの人々の賞罰を定め審判す。其ときに於いて、此ミイラよりはかへり、其審判をうくゆへに死体保存をなすものなり。

第二　　アツシリア(バール教なり)、バビロン人の宗教は審ならず。近代に至り欧州の学者、古代の都趾を発掘するに至り、寺院、其他の宗教上に用ゆる道見を発見せしも未だ明ならざれば略之。

第三　　ヂユデヤ教、ヘブリュー人教。其アブラハム最古の状を審にせられども、紀元前千三百廿年頃、ヂユ人種の史の始まるの頃より、宗教は大いに発達して、宗教、人種とまで称するに至る。祭政一致にして、神の祭を以て、政治との国をおさめ、漸々と発達してモーゼズなどの出るあり。遂に、旧約全書を以て、彼等の聖典となす。一神教なり。耶教の根源なり。ヘニシア人教は、此人は多く実業上にこり、宗教上には極めて粗末麁大の教にして、これも審なることをしらず。ヘブル人は、其本土メフポタミアを去りて、カナン地方に移住せし人種なりしか。元来、同人族は古来伝来の一神教を信じ、只一上帝を崇拝するを固守し務めて、他宗と混するを避けしかば、当時カナン人族の宗教。

第四　　バール宗、太陽を拝する宗教なれば氷炭相入れず、遂に宗教上より相敵視するに至れり。故を以て、カナン人族と争闘常に絶えず、ヘブル人族、此争いにより土人為に遂に崩滅せんとするの危窮なる場合にまで陥れり時に埃及王は、ヘブル人族に西南ナイル河口にあるゴセンと云へる土地に転居するの許可を得。此為消滅の難を逅る。

第五　ペルシヤ教　これは無の一神教にして、高尚なりしも、明闇の二神の争となり終る。オーマズト、アフリマンの二神。

第六　火教ペルシア教の所へ、メヂヤ人のシチマン人より習い得たる。異種混入となる。こ此教は火を拝し、高山の頂に於いて、絶えず火をもして天よりの告を祈り魔術を行ない誦経す。ゾロアストルの編輯。ゼンドアベスと称する霊典、今に遺せり。

第七　婆羅門教　紀元二千年前頃に、ベダナル経典出来たり。三神あり。一はブラフマ創造の神。二はビシュヌ守護の神。三はシバ破壊の神なり。此上帝は思慮することも感覚することも出来ぬ神なり。凡神教に属す。輪回賞罰説なり。此界に於いて、怠るものは、其精神は来世に下等動物に生ずと。ベタ及其他の書は、今日、欧米の文に訳さる。四種族に分ちて、ブラマミンスを以て、第一とし、其職賞は宗教及哲学にして、祭政一致の有様なり。

第八　仏教　六世紀前(又は東洋説なり)釈迦仏出でて婆羅門の幣。四族の区別などに対し改良平等の主義をとり仏教を起す。凡神教の一にして、理論至て高尚にして、南北仏教と分れ、東洋の諸国間に行はれ信者甚多し。今日に於ては、実に、世界宗教中最多の信徒を有するの教となれり。

第九　老子教　紀元前に、支那に生れ道徳論を着し虚無の道を説き、支那の政治上大に影響あり荘子起こりて、大に祖述せり。

第十　孔子教　孔子教堯舞を祖として、先代の法に則り天命を説き、上帝、宇宙の道理を基き、人論五常の道をとき、四書五経ありて、孟子大に、此教を祖述し、支那開化の大原因となれり。此教を宗教より離して論するものあれども、一種の宗教として可なり。何となれば天命に安んじ泰然として、安心立命するものなればなり。政教一致。

第十一　神道　日本神代よりの教にして、天神七代、地神五代の神の教にして情峰を□び、后世に至り大に宗教的となる。もとより宗教の性を見ず。又祭政一致の政治なりき。分派等多し。古事記などの経典あり。

第十二　希臘古代教　多神教にして、人類同朋の性にして、東洋諸国に行はるる恐怖の神にあらずして、王教の神なり。これらの宗教理想はもと有名なるホーマー、ヘシオッドの如き詩人の脳中より出たるものなり。十二神ありて、最も、敬拝くせられたり。即ち。

1　ヂュピター諸神の頭文
2　ネプチューン
3　アポロン
4　ダイアナ
5　バルカン
6　マーキュリー　神使
7　戦の神
8　第一神の妻神
9　智勇の神
10　カマドの神
11　農の神
12　愛、美の神

此外無数の神あり。ヘリオス、バクチュス等の如し。后に至り埃及小アジア、ズレースより混して、儀式エリューシアシ人の神などを掲要せり。

俗人の礼拝、祈祷、報謝、懺悔をなし、山頂森林中、羅洞中、寺院中、特に大祭日に於いて之を成なし、又は起寺、祈祷し、両手をのべてなし、誓盟をなし広粛なる行例及宗教上踊をなす。

歴山后宗教はバール教埈及教、希臘教の三混合もの行はれ、同時に波斯人、二神教も猶太人の一神教も共に存す。

13　羅馬教　　古来一国民よりならず四種の族より成り、従って、各国民有の宗教組織は法律の思想と混合し、一種特別の風をなせり。Had a strange and gloomy rcligion. 公園に於いてヂヤナス寺は、全く青銅を以て造り、最古の作なり。古来よりの習慣として平和の間は門戸をしむることなるに、此寺院の戸、八世紀間に唯の三回閉じられたるのみ。以て、其ローマ人の戦争の間断なを知るべし。

14　耶教　　オーガスタスの時代に生る。猶太人にして、旧約書を学び、王教説、一神説を述べ、宗教の大革命をなしねたまれ。遂に十字架にかかり死刑せらる。徒使十二人ありて、其教を伝へ。ローマ第四朝コンスタンチンのときに至り国教となり、后東ローマをグーキ教とし、西ローマをローマンカソリックと称し、二に分れ之を旧教と云う。后ルーテルおこり。新教おこり。遂に、今日の如く、各国に各派出来ゆるに至る。約新書の聖典あり。

15　回教　　五百七十年、マホメツト、アラビアンおこり大に宗教大改革をなし。遂に剣にかかるかコーランの聖典に伏するかとの二法を撰ばしめてアジア、アフリカ、欧にはびこり土耳古、波斯、印度等大に盛なり。

16　朝鮮教　　孔子教に少く変化を加へ、其教主とする所は、祖先、国王、父母、夫婦、長者、朋友を尊敬し、而して、之に一、二の敬天学を加えへたるものなり。国中、神祠なく、祈祷のことあれば清潔、秀霊なる山岳に登り禍福を祈る(仏教寺院、仏閣存す)

17　古代ペルー教　　インカス人と称し、太陽を拝す。これ千五百三十二年、ピザロー旅者の発見する所なり。

18　ラマ教

19　南洋土人教

20　古代メキシコ人教

21　唯一教

22　宇宙神教

23　阿弗利加蕃人教

24　余教

第８章　第一　宗教論　　哲学

①　宗教は知力的、懐疑におこり。理想を生じ、情感的、信仰によりて、安心満足し、以て□力的、道徳行為となるものなり。これ宗教の全部なり。尓るに、此三股の中、宗教の本部として、地平線上に顕る所は情感的、信仰なり。而して、其知識的、懐起の部は、一は宗教に至るも、其一は、ますます進んで哲学を形ち造るに至る。尓れば、宗教上の理想は哲学となりて、地平線上に顕はれ、又道徳は倫理学として、地平線上に顕るゆへに、宗教は地平線上に出るものは信仏の一なり。又最も大切のものなり。信の定義は后になり。

②　又宗教は厭世教なるか。楽天教なるか。慨して、論すれば厭世教と云うざるべからず。何となれば地平線上に顕るる厭世教なればなり。尓れども、宗教其全部に至りては厭とも楽とも限るべからず。厭楽の二を共有するものなればなり。尓るに、世間では人の、此世に存し生活をなす。日常の起居、身体、動作ことごとく楽世教より出ざるはなし。大にし

て社界の老人、国家の観念小にしては、一己人の利徳、家族の團らん、死滅の嫌じ、□□の望み一として、此世を離れての考へならず。此世あり。此世を以ての考へなり。ゆへに世間、俗人、一般の善人は皆、此楽世教に外ならず、ゆへに宗教は楽世あるにあらず。尓れども、楽世のみを知りて厭世を知らざるは、愚心の至極なり。恰も、小児の一時の快をむさぼりて、永遠の快を求めざるが如しく、高尚の考より、此社界を見下すときは、実に人間の生活、今は、之れに外ならず。尓らされば、大人らしき永遠の考えへをなさざるべからず。もし小児の永遠の考へをなす。能はざる如く人間も、此上の高尚の観念をなす。能うずと云へば、夫迄のこと。いやしくも高尚の思慮を有し□べき道を求むるの念あるものは、何ぞ、楽天のみに迷はざれて厭世を知らざるの愚、甚しきやと、此楽天厭世の二を合してとりものなれし。世間の地平線上に顕るるときは、厭世教として顕るゆえに、世間往々宗教を以て、厭世教となす所以なり。又其分子は如何なる楽世教にも存するものなり。

第二　　心論

心識不滅　霊魂は死するや否や。曰く、世人の考ふる如き魂は消滅す。尓れども心はあり。其心有る有様も大に亦世人の考えへとことなるなり。吾々は心と体との二より成るものなり。尓れば心と物の二原素相合したる上に於いて、種々の考へをなすものにして物心結合現象上の考へなり。人間萬事皆これなり。尓れども、又物心の相離れたる時の有様をも考ふことを得。

一問　物心離れたるを考ふるも現象内の考へにして実体は易ななりや。しることを得ざるべしと。これらの問いは、撞々たる哲学者にも不可知的も不可知的と其知したるものにして、やはり可知なりと論するの愚論をなすものもあり。夫れと同様の理なれば説明の限りにあらず。(例せば可知を二に分かち、一を不可知とし、他を可知とせんか。先に可知を二に分かちたる抑も可知とは何ぞや。不可知に対して云はずんば、其の知と云うことを得ず。名は、すべて相対に由て得。又不可知と可知の二を分つとき、已に云はずとも不可知の意は了解せられ許されたることなり。もし之を云うときは、其可知に対して名出ざるべからざるの難あれば。かかる愚論は差止めて、只単に可知、不可知の二に分ちたるものなり。考ふべし。)

心は常住不変、不生、不滅のものなり。通例云う心とは、物心相合したる上のことを云うなり。又図解せば。

1) a=は物とかあり。b.c.d　皆同じ。

2) a.b.c.d あつまれば、生物出来。

3) 其生物を生ぜしむる理由は、イロハニの因果に由るものなり。

因果	肉親	a.b.c.d	物質
	霊魂	人・生物	
	心性	形式	

a.b	b.c	c.d.e	d.e.f.g	e.f.g.h
イロハニ	イロハニ	イロハニ	イロハニ	イロハニ
f.g.h	○	j.k.l	k.l.m.n.o	l.i.i.n.o
イロハニ	イロハニ	イロハニ	イロハニ	イロハニ

已上の所論の如く、心はイロハニの能力を有して不生、不滅の更に変化なし。尓れども、此形式を満たす所の物質､財料の変々化々するに於いて a とイの心は b とイとの心ならず。又 a イ、b ロ、は二の心は b イ、c ロは、二の心ならず。(所謂る魂と予は□く)財料の方は時々殺那に変化するゆへ。此物心相合して、出来る所の魂も時々かわる。尓れども、心の

本体に至りては不尓。又第一の所に ab と財料は二にして、心の方は、イロハニの四を挙げるは心の全能力を顕す。全財料のなきときを示し云は植物に生活あるも感覚なきが如きを顕す。又 d.e.f.g の所に至りては、全くもとの財料のかわるを示す。これ生理上、七年毎には身体の質、一変する理由に当り。又 e.f.g.h とイロハニの合は f.g.h.i とイロハニの合い□ひ、或は善になるあり。又不完全になるを示す。而して、死のときに至り i の一つ欠けたるは身体の老すいして財料の不完全より魂一つ滅したるを示し。死後 o とイロハニは、魂消えて(魂とは、a とイ、b とロの如き)只物心離れ、体は死滑となりて残り、心一つ存するとき。而して其心か。又前生の業感、因果によりて、前の体とは托て財料のことなる(ときとしては同一のもなることあるべし)j.k.l とイロハニの合したるもの出き、遂に、其より完全せるものを仏とし不完のものを地状罪人とす。

二問　物心全く相離れ因果の連らく相きりたるものを仏とするか。又は其物心統合のもっともよきを仏とするか。

答　小乗にては物心相離れたるを仏なり。悟なり。灰□滅智なりと考へ。大乗では其結合の適当せるを真悟証仏とす。

三問　己上、財料は如何、時々変化してゆくに、心の方、更に変化せざるは如何。

答　これ物心相ことなる所なり。心とは形式なり。物とは、またの財料なり。ゆえに財料なり。ゆえに財料は新陳代謝、変化するも形式は更に変化せず。これ形式たる所以なり。形式にも因果の如きあり。人々個々の心の如きあり。可知、又先の図に仏の境界は。或は図解すれば。

a.b.c.d
b.c.d.e
c.d.e.f　　－　物質　－　metter
d.e.f.g
e.f－x.n
イロハニ　—　心　形式図式 —　form

此図の如く、ありとあらゆるもの(元より其善良の分に適当の分)の多くあつまり、其適当のものにて、これより一つも□感すれば、其ものは不完全となると云うことあらば。或は、其境界を指して佛果と云うべきか。

巳上にて心転生。転回、不滅の道理及魂と心の区別明了なり。今少なく魂と心のさを述べんに。色なり。声なり。味なり。対すべき感覚及苦楽、恐喜、皆物心相合せずはならず。死後に苦をうくるかくの如くに苦ひとか楽なとか考ふるは、即ち地獄、極楽を想像し人間の如く思うは間違なり。これは、此身と心と合しての苦楽なり。たとい其心たりとも体質ことなれば未来の苦楽は大にことなる。たとへば、小児のときは、親はおそろかりしに長しては。不尓して、或は、地震なり。火事なりらおそるる如く。生長に及んで身体のかわり、又心と物の結合の順序よりなるに、従って思想も異なるが如し。一端此身体と□て死のときに至り離るるときは、一時其身体を得るに於いて一定の時間を要すべし。尓るときに於いて漸々又物資を得て、心と結合するに至る。而して、其如くに生死、転輪するは、これ因果、業感にありて起こるものなり。

四問　因果、業感は心にのみありて、物にはあらざるや。物には、其報少きや如何。

答　不尓　尓れども、心も因果、業感も共に理則なり。形式なり。由て因果の直接あらわるるは、物心相結合したる上に起こるものにして無形のものとならず。尓れども、其体に果報をうくることは少し其理由は明ならざれども、多分ものなるゆへなるべし。尓れど

も多少はあり。之にて足れるものなる歟。倒せば人死す。其体、生前の召人なれば悪く葬られ、后よりもしたわれ又たとい不幸にして山に死し、水に溺れて、人其人をしらざるも此人をしたうが如し。これは心に付てしたうのみならず物心相結合したる人。又は其死体に付ての果報なり。尓して、其心の方の果報は非常に大にて生前の業因又は過去、先生の果にひかれて種々の結果をあらわすべきなり。己下、今は略し、他に記すべし。

第九章　　比較宗教学

第一　分類論

第二　系倫論

第三　理論空想

第四　有益有害　　写心経を見るべし

　　国家上　　道徳上　　平和戦争

　一　厭世教　　楽世教

　二　凡神有神論

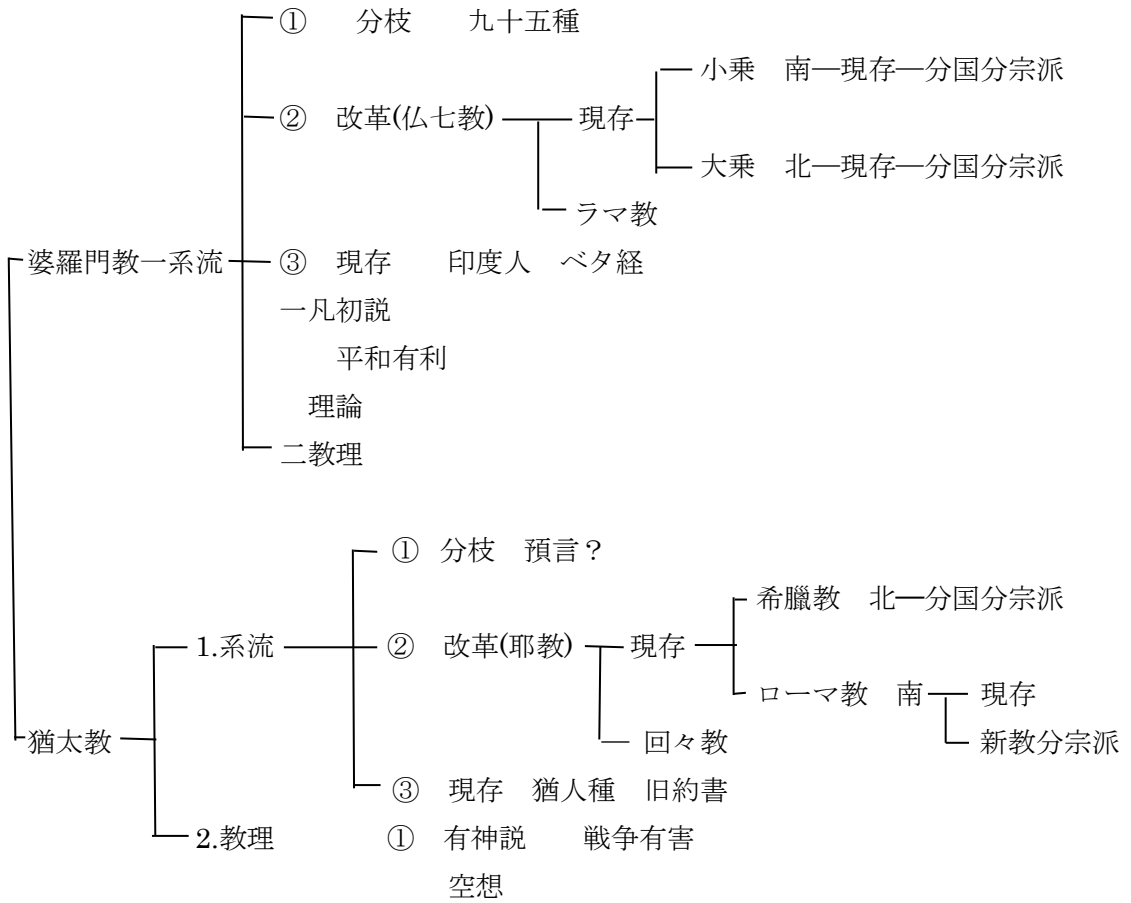
第五　主観的宗教学

第六　客観的宗教学

第七　主客の比較批評

沿革　宗教を学として論したるものは少きのみならず。其学として論じたるものも甚だ完□せず。只一部の議論にして、云はば宗教学として完全なるものなしと云うのも可なり。例を挙げて述ること。

初一対



年代、教祖、性伝、教理、布教、現存、社界、国民、教徒、国、地形、道徳上。

国家
- 猶太教
- 神道
- 易
  - 儒教―孔子・孟子
  - 道教―老荘
- 婆羅門教
- 波斯教
- 埃及教等

普教
- 仏教
- 耶教
- 回教

第五問　会社は無形のものなり。建築物と社員とよりなる建物一つをつかまへて会社云うべからず。人間も社員のみにて称せられず。人が、此にくい、可愛い、の心は物心よりなれる我魂なり。これは無きものなり。其物に就いて、未来の苦楽、昇沈をのぞむ会社と社員とを混する如く、我魂と心とを混するにあらずや。

〇宗教学考究法

宗教学性質。定義及他学との関係

①　諸言　研究法

②　総論　(1) 定義　(2) 他学との関係　(3) 講究法

1 釈迦の傳の如きは、西蔵探検カシュミル、印度、ビルマ、シャム地方より研究の后にあらずは明らかならず。

2 ヤソの傳は大に明になり、只紀元の 4 年斗り異説あり。

3 各教(1 伝記開宗　2 教理　3 宗派　4 伝播　5 利害　6 道法戒律)

4 今日は、実に宗教の必要のときなり。道法腐敗、欧化主義の為に東洋古来美風は破し……宗教学必要なるは、此学問の世界に又宗教の必要なる為には、これらの研究は実用上としても必要なり。実に真正に社界、政情、人情、風俗、言語、文学、道法、哲学等をしらぶるには実に宗教学必要の起る心は学尓り。

第一章　総論

1 必要

2 沿革　宗教学書、英独など不完を云う

3 定義　この学の目的。宗教学上宗教及其目的

4 他学との関係

5 考究法

第二章　宗教の種類(動植の種類の如く)

萬国宗教　1. 古代　2. 近代

第三章　宗教の分類(分類、鳥獣魚類等。又は異花陰花等の如し)

１．主管観教　２．厭楽教　３．有凡神教　４．普及国民教

第四章　比較宗教(比較学)

姓分類終わりて宗教の分類なり。光なり。

比較して分類するにあらず。分類して、この義立つか而后比較し淘汰す。

第五章　**宗教進化論**(宗教歴史学、発達生理学)

1.大古教　2.近世教　3.野蕃教　4.開化教

第六章　**宗教哲学**(器官学)

1.理想　2.信仰　3.道徳

第七章　**宗教と社界**(教育と宗教。応用、動植、農業植、医学極めの如く)

1.祭政一致　2.国教　3.政教分離　4.文明、人情、風俗　5.道徳　6.教育

実際的に(個人的―道徳。社界的―政法情緒)

第八章　**組織宗教学**

1.宗教の定義　2. 完全教

神論　心論　理信法

第九章　**宗教歴史学**

人類宗教学　宗教者学

宗教通法学　宗教地理学

宗教は魂と心より安心に付け論す。

古来、宗教ありて、心ありて滅せずと云へども確証にともし、今之を明にすべし。

欧州の沿革　結論の訳　及標。

宗教学のより系流だて学科となるものなし……の如し。尓れとも、これらの書にありて宗教学を組織するには好材料たるものなしは、これ又貴重の書なり。

哇布国教はもと偶像教なりしが如し…。

独のドクトルオットフレーデーレ氏は、宗派は哲学書の結論に於いて、欧州、今日の宗教学の有様を書けり。由て、其大略を決記すべし。

宗教の起源や実に史前にあるものなれば、此れが、研究にも人類学の考究を大にやらずるは、あるべからず。

宗教学の材料を萬国史、人類学書に多くとる。これ宗教学書に乏しく。此学の一の科学となりて、考究せられざるによる。

心と魂とにあり。今弥陀の法の如き。信じて転迷開悟とす。御心とは教信するとは、此物心相よりて成る。魂上に信仰は起こるものならずや。もし、之を離れたるの心なりと云はば、実に信も甚だ空漠として情感の起こるべきはずなし。情感とは、全く魂上にある化学上の一の分子の如くして、元素の如きものにあらず。

答　尓り転迷、開悟なり。信仰なり。もとより、此魂上の作用に外ならず。尓れども、此魂が体の前滅后、生ずると同時に変更し、又身体の老すい。死滅するに径を老死す。尓れども、此魂上の因果は、つまり心に帰するものにして、心の転生によりて、ことなるものなり。一の会社破るるとせんか。会社の建築は只、其能作用の人に由て、支配せらるるものにして、会社、即ち社員にあらざるも、此社の能作者主、動者、形式は全く社員、即ち其人に帰するが如し。其積しては建築にあらずして、其社員にあるがごとし。

予は、結論に於いて、現今宗教学の形勢を論ぜんとするに当たり、各国学友の詳報に由り大に益する所あり。宗教の教論未だ詳細ならずと云ども、又以て、欧米の学者熱心に研究をなせるありて、英仏等に於いて、各宗教の探求、比較宗教学の考究は宗教史上、実に有益のことなり。実験上、哲学上、宗教考究は、漸々発達するの□なり。伊太利宗教学の形勢はア・ベラ氏、ヘーゲル哲学の知識を普及マルニツとして千八百七十六年、**ヘーゲル氏の宗教哲学の訳をなし、之れが沿革をなし、前二巻已に発刊になれば、ベラ**氏はヘーゲル学派の人にて、其考えを以て、ストラウス氏の新旧の信仰なる。著の評に於いて、大に

自己の基督教的所見を以て、之に反対し、宗教の人世に於ける中心点なりとの考を以て、又萬国の教なりとの考にありて、政治、其他、百般のこと皆宗教の必要なることを説き、千八百七十四年、カバワー氏の□論に弁駁(べんばく)として、自由国に於ける自由教会なる着書をなし。哲学上の論集に於ける千八百八十三年、宗教上の格言、基督教と社界の道徳との関係に就て、論せられたり。

(2)　又同く、ラハエルマリアム氏は基督教、旧教及教育のことに付て論し。又中世ローマ思想。歴史的哲学上の考究をなし。其近世の思想との関係を論し、最后にヂョールダノブルノー氏の言行録を顕せり。盖し、此は宗教学者なるを以てなり。

(3)　如何ベラ・マリアノニ氏のゴンハーチブナルと異なり。テレンヂヲマミアニ氏出て、未来宗教に付て論なり。唯一神教を主張せり。

(4)　ガエタの子グリ氏は宗教危急に付て(千八百七十八年)論なり。

１．因果論　人は死すべきものなりとは、すべての人は死すと、云うた後にあらずは成り立たずとせば、この断案は到底云うことを得られざるのものと、云いざるべからず。例せば我家、隣家の誰々は死したり。又今日迄、すべての人は皆死したり。而して、誰かれは人ゆへ死するべし。又は□□村の人遠い見ぬ西洋人も死すべし。未来、未だ生れざる人も生した後は皆死すと云うこしを吾人は云い得、又真理なるは只過去の例及、目前の例を以て如何、無限の遠方の人、永遠、未来の人までをおすことを得るにあらずや。之れは、例なり。之と同じく吾人は日常、因果の連絡をしり、其確実なるをしる。食すれば腹太くなり。水に入れば濡るる。火にふればあつい。皆一事、一物、皆、尓らざるはなし。又古来の人多しと雖も、因ありて果なきものを見たることなし。茄子を植えば茄子ハエ来たがって、胡瓜の種に茄子の生えたることもなく、因果あることをしり。夫と同時に茄子には茄子。瓜には瓜と□因には□果と云う関係ならざるを見たることなしとす。尓れば、之れを以て、推めて西洋には如何に期待のことをなすと云へども、因果なきことなかるべく見ぬ。西洋人の死すと云うことを云得る如く見、又西洋にも罪人は罰せられ善人は、賞せらると云うことを考へ得。又未来にも応用せられ未来は見ぬからと云うならば見ぬから、今から生れ来る人は死ぬと云うと同様なり。尓れば、因果あることを見とむれば通常の人ならば、今日、飯を食わねば、明日は飢えと云う如く。此世で、善悪の行いあれば、未来、之れに対する善悪の結果のあると云うこと明なり。此因果上より論するも、未来なりては、道りは立たたなくなるなり。

２．　鈴木政吉話せり。予の放逸にして、ワビの為とを神□□神を信じたり。昼夜一心になりやる一時故意にひどくやり、遂に信者と見とめられたり。他人如何なるべしと。

３．　江州人、妻気に入らざるより、首吊る。其下りたるときの苦しさ云いし方なり。其縄を外さんとして、手を上にあげ縄をとらえんとすれども、手肩より上に上る能わず、あげんとすれば、ますます下り、遂に生気を失うに至るときに、人之れを見つけ、縄を解き、まい抱して、遂に半時余にして蘇生す。其后、首に縄あとありて、半年も去らざりしと、其人、人に逢う毎に、其苦きを述べ、助らんとの心おこるも手のあがらざる為、詮方なく死に至る。他人も多く左様なるべしと懺悔せりと。嗚呼、尓り、一時の感情に支配せられて首は吊りたりものの、首を吊り下がりて見れば、其苦しさに目覚め助からんとするも、手あがらず、はや仕方なく見す見す死に至る。先に死さんとするもの、ここにて助らんとの心起こる。何ぞ、始めより理性を以て、これを制せざるこれならざるか。強き情感かな。刹腹にも、第一、腹を切り、而して、后遺状などしたため、其后に喉にとめをさすと云う。これらも一は、腹を第一に切り、もはや助るの見込なきをつけしめずに、二度助かるの気

おこらんが為もあるべし。
４．　又其首吊り死したる人、其後は無感の境更に覚ゆずと云う。尓れば、其間は魂ありや否。予□して云く。魂は苦を感ずるのなくなると同時に死す。尓れども、心は独り離れて遊りす。尓れども、これを感ずる能わざるは体質なきによる。尓れども、幾分の時間をすぎて、其心は亦、体質を得、ここに因果の連絡を以て魂生じ始めて苦楽相生ずと。無覚の境に入る。即ち、更に覚へぬと云こと。よみがへりなどの話は多し。これ其道理なり。心と体と離れたるときなれば、心体相よりてなる感覚のあるべき苦楽のあるべきはづなし。之れが、其心□体質を得たるときには、其苦楽を感ずべきなり。

宗教大学院　宗教書林　宗教書林
宗教大学　仏教大学
予が、一生の目的は宗教学の完成にあり。此宗教学に分けたるが如き□□に付て、□財料を集め精密なる宗教学たらしめ宗教の本性を明らかにするにあり。其全部は八章にはたりなる。

哇布、フィヂー、タスマニヤ、オーストラリア、サモア、パプア、ボルネオ、ヒリピン、ヂャバ、タイワン、琉球、日本、アイヌ、朝鮮、サイベリア、カムサッカ、蒙古、満州、支那、安南、暹羅、ビルマ、西蔵、カンボヂア、印度、カシュミル、セイロン、ビルチスタン、波斯、トルクスタン、アラビア、トルコ、コーカサス、魯シア、バルカン、キリシア、ルーメニア、ゼルビア、ハンガリー、ラプランド、スエデン、ノルウエー、デンマーク、独乙、オランダ、ベルギー、スイツッル、伊国、仏国、スペイン、ポルトガル、英、スコットランド、アイルランド、エスキモー、アルゼリア、チリボリ、ニュービア、埈及、アビシニア、コンゴ、ユガンダ、ギニア、マダガスカル、ホワテントット、ケープコロニー、ザンヂバル、ナタル、カフラリア、リベリア、カナダ、アラスカ、米仰人、本仰人、米人、メキシコ、ユカタン、バリズ、ギュアチン、ホンヂュラス、ニカラガ、サンサルバトル、コロンビア、イクアドル、パラガイ、ウルガイ、アーゼンチン、ペリュー、ボリビア、ブラジル、ギヤナ。

宗教進化論　日本　宗教革命論、宗教進化論、学校史論
西洋　スペン氏、宗教進化論
実際宗教学　仏教大難論、政教日記、社界学。
宗教的文学、風俗。
宗教哲学　オット氏の宗哲(石川の宗哲は、何にも入らず)、フッド宗哲。
比較宗教学　比較宗教、マクスの宗学、タイル氏の宗教史。
宗教種類　人類学書他行書、歴史、セイロン島法、暹羅帖、ラマ教、西蔵紀行下巻。
萬国宗教全書
宗教歴史　三国仏法史、法王史、等(教会制度)
宗教分類　マクスの分類、タイル氏の分類、比較宗学一□他、社界学。
(情感、信仰、道法、宗教定義、成分、地獄極楽)
組織宗教　暹羅の原語、レーレゲョール(復読、閲視)と云の語より転用して、シセロ始め、テレリジョン伝。野蛮、未開人の信仰に反対せる特別の神を崇敬する意義に用ゆ。又羅典の学者セルウェイスリプッイ、マズリイサベンは、レリングェーレの語より転用すと

も云う。大同小異なり。クリストの学者レクタンツイは、レリガーレ(結合)と云う。語より転化するとも云い。神と人の結合しと云う。イエロニューム及アウグスチンも同義なり。尓れども、オウグスチンは、レリゲーレと云う侶より転化して、再興の義あり。

近世、各国の哲学者種々の意をつけ「信仰」或は「神を信ずる」。法意にし、又東洋□□あり。ローマ、ギリシア、皆其国々の宗教訳たるなり。ギリシア、ローマ人は、人々が神霊を敬畏する事なりとし。幽霊民族も神を畏るるを以て、宗教の本義とせるが如し。今日、普く世界の宗教に通ずゆへに、己上は合せず。(石川は、霊界(レイコン冥界の義)存在の信仰、人に神の関係の信仰これなりと)。

世界　　日本　　仏教

人間は動物より進化して、今日の人間となる。此人間、又一増の進化をなすものなることを知らざる可らず。之れに、一個人の進化し人間総体の進化の二なり。総体の進化は容易に得られざるとも、日夜、人類の日進月歩しつつあるは、之が為めなり。而して、一個人の進化は難し。尓れども、早々之に達することを得。即ち、此人々の心能くおさまり、此肉体の為めに精神の左右せらるることなり。情欲なく迷執なく、宇宙、天然、自然の大道理に順じて精神的、生活をなす。之れなり。之れ人間、進化の極なり。進化の極、始めは全く、有形的、客観的に起こり。段々、進化して人間の如きは精神、肉身両立の境界なり。之より一層進むときは精神一方となる。肉身のある間は有限、不自由なり。精神的生活こそ自由なり。これ宗教の教へなり。進化の極、宗教なり。神界、仏界、即是なり。

神道論　　神道は、宗教にあらず。又識者は常に宗教ならざるを論じ、且つ、神道者夫れ自身も宗教ならざるを説く。尓れども、之れが日本一般に殆んど、宗教として存することを見る。之れ如何なることなるや。是れ古代は、祭りなりしも段々に変じて宗教の形ちをとりたるものにして、祖先教の種なり。而して、最も、之れを宗教によせて説きたるは原因あった子にして何年此のことなり。又当時に於いても神道の宗派□程あるを洋にせざれども。黒住教、転輪教、トーカミ教、蓮門教は、皆宗教□のものにして、近年に至りて何れも起りたるものにして、只祖先を神として祭祀するは、只諸々の神社たるにすぎず。而して、それも己に琴平の如き。伊勢の如き、出雲の如き、皆人民の之れを信ずるは、宗教の性を有するものなり。如□ことは、内外名実相反するものなり。これ神通も仏教を混じたるに由る。現に連門、転輪教の如きは神道と云うも、むしろ仏教の方に属す。己上の現象は、如何と云うに、神道は宗教にあらざるものにして。如何宗教として存立するゆへに、此信者も大に宗教真正の情緒を発すること能わずして現世祈り□事資難よけ悪摩払い等の肉体的、下等のこととなるに至るゆへに、今日の神道家の義務つとむべきことは、神道、宗教にあらざることを明らかにして、只我邦、古代、祖先を祭祀するものにして国体と共に日本特有のこととなし、宗教の性を脱せしむるにあり。尓れども、神道一致派中□全たる宗教として存立し、宗教性をはいすれば神道の骨髄去がたき派なきにあらず。之等は一大難問なり。

1 萬神教、2 植物教、3 禽獣教、4 祖先教、5 偶像教、6 凡神、7 有神、8 神、9 多神、10 厭世、11 楽天、12 国民教、13 普及、14 主観的、15 客観的、16 人間教。

此書は、三大目的。宗教学、系統、新論。

1．宗教学の必要。未た欧人、科学とせず。命るも実なれ例証すべし。

2．其組織系統を充分に示すこと。

３．組織宗教学に於いて宗教、性質、哲学等のことを細論すること。
宗教の定義も其結果切容り云へば安心、立命、満足にあり。又其有様より云へば情感的信仰と云へり。又手段、方法より云へば神仏の礼拝とも云うべし。
1 連門教　2 天理教　3 平田教　4 黒住教　5 大社教　6□成教　7 トウ神教(碑文写すべし)
五行、幹指、易、墨色、人相、みくぢ、祭、八卦、
比較　　Out line of His tseu Relgtr Tiele　　の略訳。

地獄極楽論　　高天の原、天国、ヘル、パラダイス、子くにそこのくに、ヨミヂ、地下を如何にほるも地獄なく。永遠鏡にて天星を見るものなし。屈しん飛きょうと云う。之れ遠きに求めず我心にあるを示すなり。
宇宙神教
唯一教
モルモン教
新教　　クエカー、ネーテル、独立カルビン、一致、組合、英国、スコットランド。
カソリック教
グリーキ教
回々教
セイロン教　　セイロン島誌
暹羅教　　暹羅仏教事情
西蔵教
日本教　　真言、天台、禅、真、時、日蓮、法相、花厳、融通、律。
支那教
ラマ教
儒教
道教
神道　　黒住、冬成、連門、天理、天輪、等。

心説の比較　　三身一体、霊魂不滅、輪回説、信仰論、本尊、不可思議論、天国地獄説。

心理的宗教
　　知力的宗教
　　上巻的宗教
　　意志的宗教
（宗教と真理　哲学
宗教と人□　道徳、社界
宗教と研究組織　学問）

哲学的宗教
　　唯物的宗教
　　唯心的宗教
　　唯理的宗教
（客観的宗教
主観的宗教）
凡神、有神

自然に従って、春は花見。秋は月見と時々の変わるに従い、我心を楽しまして、哀ましむべきか。又は我意志よりして自然を支配し、花を見て楽しを特になさず。却って、楽むべき時も不快に暮らすが如くなすと。何れか生活の度高きや。一は、自然に支配せらるる

が如きも、幸福なるが如く。一は、意志の侭なれども不快、不幸の人ならずや。両者何れを撰ぶべきや。

組織宗教学

第一章　序論

前数編に於いて宗教の種類、分類、性質、発達、其理、実際上之を論じたり。これ各宗教を研究するの各部に付て、論じたるものなるか。今此論に於いては己上数編に由り宗教の本体を考究せずんとす。

この辺の考究は、

１．宗教の定義		1
２．宗教の原素		
３．霊魂の不滅	心論	3
４．因果律		3
５．賞罰		4
６．信仰		5
７．本尊		2
８．道法		6
９．儀式		7
１０．僧侶、寺院		7
１１．政教		7
１２．完全宗教		1

無情観　習慣、無情規。道理規、美妙観。此三よりして宗教は生ず。而して、今日は、其習慣性により、宗教心の養はるる。甚だ多しと雖も、此習慣の起こる原因は結極、天然の無情規に基いせずればあるべからず。之れに社交上、一身上、天然上、家族上の無情規ありて、不平、憂鬱、悲哀、不足、落葉、枯死、不定の生涯。天然、整然の規律等。皆宗教の原因なり。暴風、悪病、天災地変、不思議の如きも宗教心を生じ、又推理上、遂に宗教心に達するものあるべし。不安等なり。

不安心　　避難　　推理　　美妙規　　完成幸福　　純真美体(全体)

心体不滅　　宗教は、人間総体より云へば、主観的にあるものにして、個人各自より云へば、客観的に存す。尓れども、遂に主観たるを免れず。

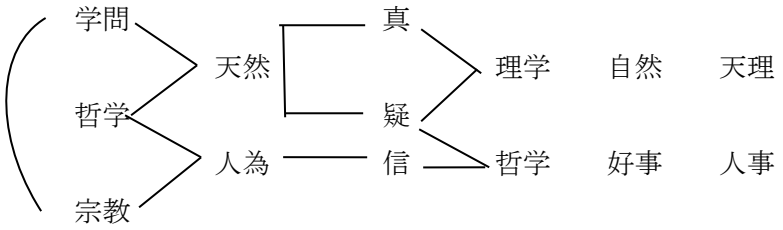
両界　　人生は世出世。両界生活をなさざるべからず。もし世界生活のみならば、悲哀、失望、仕損し、皆此人生を去り死ぬとか、兎に角、無生の境界となり、身心の置き所なきに至る。尓るに、宗教上の出世間の生活をなすときは、仮令、世生に於いて仕損じ、失望あるも、此境界は円満にして無限なり。此界を本生活として、世界生活上に手を伸ばして事をなせば、成熟せば、共に満足もし成らず。又如何なるしてに逢うも、其ときは本生活にかえり、無上の生活をなし。落胆なきなり。これ宗教なり。

第八篇　組織宗教学

第一　　宗教　　定義　　非宗教

第二　　宗教心　　起因　　習慣　　無情観　　理想観　　美妙観

第三　心霊論　無心論
第四　因果律　附賞罰　稚序論　無神論
第五　本尊　教祖　顕示
第六　信仰　疑解
第七　道徳
第八　儀式
第九　僧侶　寺院
第十　政教関係　社界と宗教
人世、所感(大□)、仏事禁酒、



考ふるに宗教は、つまり人心にありて、主観的なりゆへに練心、安心を得ば以て、其目的を達せりと謂うべし。而して、之に達するには信の一つを以て得ゆへに信は、宗教の根本にして、信即安心。又は練心にして、即ち、証得なり。之れ目的なり。尓れば、信の呈度には、或は、種類により、或は、智識、情感如何により、種々の差あるべきも人々の自督に至りては、更に差なしゆへに、信にして、充分なれば、如何なる教も宗教の価いある満足の教なり。其中、人心に最適するものを以て最上の教とす。
希臘教
羅馬教
埃及教
婆羅門教
波斯教
猶太教
儒教
道教
神道
佛教
耶教
回教
組織三部妙典
　１．釈尊説法
　２．弥陀如来之傳
　３．人世
　４．極楽壮厳

宗教の二大部　一に、信仰。二に、考究。一は、絶対的、情感的、信仰にして、確定不動。一は、相対的知力的、推理にして、進学するものなり。

田舎の暮	都会の暮	学者の暮	無智の暮	幸福の暮
不幸の暮	欲情の暮	出世の暮	二世の暮	

皆さん、よくよく人間生活の状態を観想よ。男あり。女あり。貴あり。賤きあり。貧づしきあり。冨めるあり。賢こきあり。愚かなるあり。田舎の住いあり。都会の住まいあり。一生涯海を見ず、小さき湖みを見て大海を考へ塩肴は潮水の中に住むらくにて興味なりと思うあり。又は、生涯を水上に送り、稀に上陸をなすの水夫もあり。或は、支那廣東の如き水上に住居するのものあり。又高島の炭鉱夫の家族の如き、生涯を地下に送り、稀に日光を拝する土龍的生活をなすものあり。北海の土人、南洋の蕃人の如き、動物的生活もあり。山に薪を伐る親父あり。川に衣を洗う婆あり。田夫あり。野郎あり。農あり。工あり。商あり。僧あり。□あり。兵士あり。官吏あり。或は年報六千、常に二頭の馬車に乗りて、宮殿宝楼に住するあり。或は、路辺に銭財を乞うて、其日を食うや、喰はぬに暮らし、擔下を、夜を明すものあり。又はね下宿楼上、灯火に書を読むあり。親あり。子あり。夫あり。妻あり。兄あり。弟あり。姉あり。妹あり。朋友あり。親戚あり。他人あり。近所あり。隣あり。儀あり。礼儀あり。師匠あり。弟子あり。出産生あり。志あり。病患あり。死亡あり。生まれ。今日死すあり。朝に夜餓死あり。白骨なるあり。政治あり。宗教あり。法律あり。道徳あり。しくじるあり。落胆するあり。冒険あり。向うみずり。騙すあり。正直なるあり。

或有山間之伐木之老翁　　河岸洗濯之白婆

予をして、少しく人類生活の状態を観想せ令してよ男女、貴賤、貧富、智愚。或は、山に薪を伐るあり。或は、川に衣を洗うあり。田夫あり。野郎あり。田舎あり。都会あり。僧あり。俗あり。兵士あり。官吏あり。農あり。工あり。商いあり。

或は、年報六千常に、二頭の馬車に乗り宮殿楼に住むあり。或は、道に銭財を乞うて其日を暮しもあり。一生、海を見ず山間にありて、小湖を見て大海を想し、塩肴は潮水の為に興味なりと思うもあり。或は、一生を水上に送り稀に上陸をなすの水夫もあり。

有田、□田、有宅、□宅、牛馬、鹿畜奴。

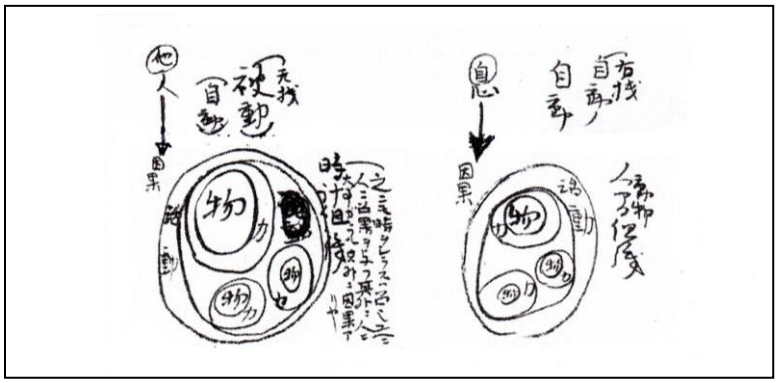
佛教要旨

第一　宗教と人世
第二　仏教智力的
第三　情感的仏教
第四　意力的仏教
第五　処世的仏教
第六　仏教の将来　　新仏教徒

愛国護法論

第一　総論
第二　日本　　過現将　　郷里在中の仏教　　世界の教としての仏教
第三　世界
第四　国民
第五　人世と宗教

戒律論
新仏教徒論
宗教学
信疑論
心魂論



光明説　　智恵の光明三途黒闇を照す。貧□の雲霧光明は明悟の義。弥陀の光明説。理想の弥陀。具体の弥陀。

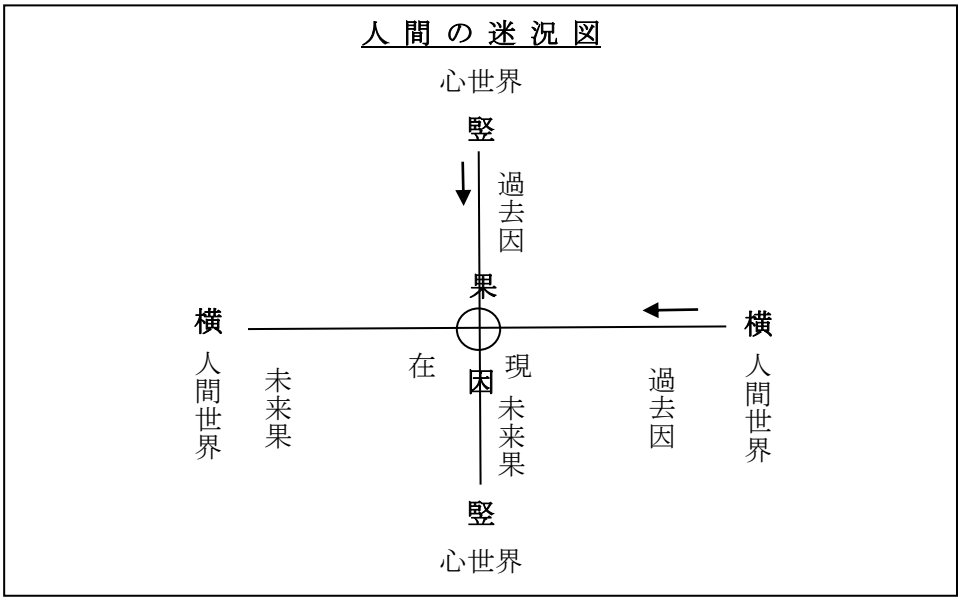
宗教学　心不滅論

云しむ

1．三世因果論
2．動物と植物の区別(心不滅上)　　心魂区別論
　　一に、横、世間の因果　　二に、竪、出世間の因果
3．心不滅論
4．　仏の力と心は区別　　転生説
5．小乗果論
6．大乗仏果
7．弥陀論(理想弥陀、具体の弥陀)
8．釈迦の顕示

第一答　　物質なく、身体なしば苦楽、迷語なし。真空なり。心に属する苦楽物より得ざるものの如き、即ち、心のみにて知る。云う如きものもやはり物を離れてあるにあらず。

第二大問　　心と力の区別如何　草木、国土□皆成仏を如何に□するや。



南北仏教全書　日本十二宗派三十何派、朝、支、暹、蔵、印度、セイロン、ビルマ、其他、転化教

心　論(学話参照)

人とは、心とミり成り。一つは、形式(Format)。一つは、物質（Material）の二より成るものなり。此形式は因果の連鎖を以て物資をとり心身結合せる有機体を作る。而して、形式のみにて、苦楽迷悟云うことなり。之れに、物質を得たるとき苦楽迷悟の差別生ず。而して、其形式に満たす所の物質最も完全なるものを地獄の罪人とも形容し、又は迷の極、又は苦の極と云う。反之、其形質を満たす物質の最も完全なるものを仏陀とも悟者とも云う。但し、十界中、小乗の灰身滅智とは其形式をして、永く物質と組み合うの因果の連鎖を絶つ様に修行するを云う。故に、仏は地獄に落つとも、小乗となる。勿れと云へり。これ完全の物質を得るの因果なきゆへ仏果を得ることを得られざればなり。但し、地獄、極楽は、ゆへに有形的となる。尓れども、其如何は吾人の想像することを得ず、只迷悟苦楽のもの云うことのみを云い得るのみ。

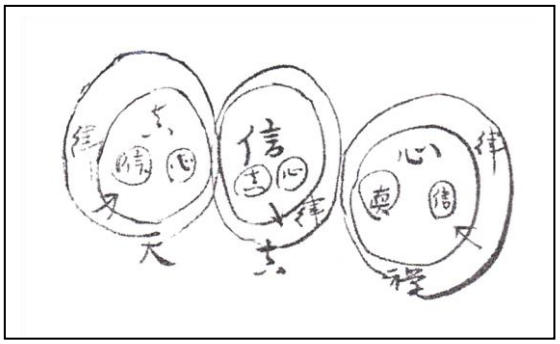
而して、小乗涅槃は、皆無、寂定一点の考へ様もなき真空なり。苦楽、迷語、固よりなり。地獄に落ちず、極楽にも行かぬ境界なり。

地形、物質の二と禅との関係。形質は自由的、受動的なり。物質は被動的、個性的なり。故に、物質は、只此形質の因果に由り質を満たすのみにて、被動的なり。ゆへに禅にては、物に関係せず。只形式の悟をはかるなり。云しむ。

仮令は、有形のものになして云へば、鋳形と鋳金との如く、ここに銅像を造らんとするとき、其銅像の鋳形にして立派にさへあれば鋳金を之に注入せるとき立派の銅像生まるが如し。鋳形は心の如く、鋳金は身体の如し。(而して、其鋳金にも銅、銀、金と種々ある中、最良の質金を以て最良の鋳形に注入せるを完全、円満の境界とす。)銅像とは、鋳形と鋳金とより成立たるものの如く、無形上に而も、鋳形たる心は有為作用。受動的、自動的作用あるものゆへ、自より因を以て、自よりに質をみたすことを得るなり。

自動と多動は、何の理によるや。若し、物質の配合如何によるとせば財物論となる。絵の輪郭と塗るときの如し。輪郭を離れて絵なし。又絵を離して輪郭なし。

物質は、不滅なりと証す。何ぞ、形式能り滅すと云ことを得なり。物質不滅勢力保存とは、物質のある所には、顕と陀とは論せず。必ず夫れには、□力具備すと論するは、唯物論なり。反之もし其論あるならば、曰く、□力又は形式も独立して、存するものにして、形式の存する所、必ず物質具備すと云うも同理なり。仮令い、具備せざるにもせよ、其形式の独立してあることを云う。何ぞ、差支へあらんや。



◎　◎　◎
心　信　真

時計と人間との区別　明治廿六年四月廿九日、動植の区別やすき如きも難しきが如く、又は、人間と動物との区別の如き。滑けいの如きも決して、不尓、本心の是より生ずる問題なり。区別するには、似た所と異あるものに限る。化学にもあり。ケイ素の如きなり。

金非□のあり。又は、筋けんと□乱ぼと活発。是最も難し。有機物と無機物、明なれども、若し、唯物論者の心を以て、之れを見るとき甚だ難なり。其二者の動く共に同理なるが如ければなり。物には、勢力あり。物にして完全に組織、構造せられば動くものなり。これに油、ネジ、人では、食物と睡眠を与へば動くと同様となる。ここにもし、一方には、心あり、一方には、心なしとせば、判然区別せられども時計に心なきこと。人に心あること証すること難し。何となれば心の定義六ケ敷。其与へ方にあり。如何様にもなるものなればなり。

【解説】能海航雲記とあるは。能海寛の雅号で記録しているものである。能海寛は、明治19年10月23日、普通教校西寮にて、チベット探検行を公言し、学友を驚かせた。その後、英語と梵語を学び、21年10月14日には、「English Composing Society(英文会)」を主宰し、学内で立ち上げ47名の会員の下で、毎日曜日に、『NEW BUDDHIST(新仏教徒)』を発刊した。22年2月にダルマパーラが来日し、京都の病院へ入院した際には、能海、沢井、秦ら反省会のメンバーが、彼を看護・見舞った。その際に、能海は、ダルマパーラとの会話で、仏教を英文で発信していることを告げた。『NEW BUDDHIST(新仏教徒)』は、NO.31まで発行された。能海の上京に先立ち、英文会を引受ける河野始治と前田得念へ書面を出し円満に引継をした。

明治22年12月22日、友人の西依一六、松島静寿と3人で上京する。先に上京していた古河勇とも合流する。文学寮生の梅原融、吉野も上京した。

明治23年1月5日、松島静寿、山中逸、能海寛、古河勇の4名が三田四国町へ下宿した。能海は、古河の文章力の高さに触発される。そして、友人らと英文会、新仏教徒を論じた。

1月15日、能海は、三田豊岡町の龍源寺越渓宗逸方へ転居した。1月29日、「Wisdom and Mercy No.1」を作り、英文を作り主義を述べんとする。2月14日、弓削、古河、能海で経緯会について話し合う。2月19日、能海の元へ古河勇が合流して、「木石書院」と名付けて、二人の自炊生活が始まった。能海は、慶応義塾へ、古河は、明治学院へと通った。慶応義塾では、英国のE.アーノルドやW.ウエストンとの出会いと交流があった。能海は、東京版の「英文会(E.C.S)」を慶応義塾内で、4級生20名で立ち上げ、『Wisdom and Mercy(智恵

と慈悲)』月刊誌を発行した。6 月 1 日、能海は古河勇との下宿生活を止めて、三田寺町の西蓮寺(白山謙致)へ転宿する。そして、慶応義塾の「土曜会」設立にも尽力した。7 月 27 日、聖地巡礼として、親鸞の聖地、稲田の里を訪ねる。9 月 25 日、「仏書を英語に訳すこと。海外布教すること。」と「春秋日記」で記録している。そして、「二河白道」を英訳して、半年後の 3 月 20 日、三省堂へ英文印刷を持ち込むも断られ落胆する。この時期には、故郷で全寮制の小・中・高・一貫の「石見大教校」を造る構想も記述している。

10 月 15 日、予てより、働きかけていた、慶応義塾において「土曜会」を組織した。会員数約３０名、各宗派の僧侶が集まり、運動、スピーチ、作文等を行うサークルが誕生した。

能海は、檀家一統から学資金により、上京して勉学に励んでいたが、普通学を学ぶことは、檀家として許されなかった。義父の謙信師からの嘆願で、23 年 12 月をもって、慶応義塾を退学して、哲学館へ転学することとなった。

明治 25 年 3 月 23 日、新仏教徒が誕生するよう能海は、宣教会、文学寮、内学院大学寮、高中、尋中へ「英文会」の件で書面を出す。そして、4 月 8 日、「釈尊降誕会」が開催され、能海が東京在京中は、必ず参加していた。

この『純正哲学自解』は、哲学館在学中の明治 26 年 2 月 4 日から 4 月 29 日までの間に記述されたもので、能海寛は、2 月 25 日、の記述で、「予の一生の目的は、宗教学の完成にあり。」、「第八章　宗教論　哲学」に記載していると記述している。能海の著書『世界に於ける佛教徒』は、明治 26 年 11 月 18 日に出版されたものである。遡ると、この『純正哲学自解』が 4 月 29 日の脱稿であるから、内容的には、『世界に於ける佛教徒』の原稿も、この時期に、ほぼ完成していたと考えられる。8 月に、「諸言」を著者識として原稿を完成させ、9 月に、大内青巒師が序文を寄稿し完成を迎えたものである。能海は、『世界に於ける佛教徒』を、当初は、『新仏教徒論』と考えていた。友人(大内青巒、古河勇？）らのアドバイスにより、『世界に於ける佛教徒』と改題したという。同誌の「第二章　新仏教徒」で新仏教徒論を述べているので、本人の意思は、読む人に伝わってくるのである。

『純正哲学自解』の論文中の未着手の「戒律論」、「新仏教徒論」、「宗教学」、「信疑論」、「心魂論」は、明治 26 年 4 月の時点では、間に合わず、「戒律論」は、7 か月後に出版した『世界に於ける仏教徒』第 6 章「道徳上の仏教(戒律論)」で著している。「新仏教徒論」は、同書第 2 章「新仏教徒」で著している。「宗教学」は、能海がチベット探検行から帰国後に『世界に於ける仏教徒』改訂版で完成をさせる考えであった。

明治 33 年 12 月、第三次探検で雲南省へ向かう前に重慶で記述した「世界に於ける佛教徒」の改訂版の原案が 10 項目によって、書き残されている。これによると、能海が帰国した暁には、仏教研究者の共著で出版をしたい。と目論んでいたことが読み取れるのである。

１．宗教革命の時期　高楠博士。２．新仏教徒　能海寛。３．宗教学上の仏教　井上哲次郎博士。４．哲学上の仏教　井上博士。５．歴史上の仏教　村上博士。６．道徳上の仏教　雲照津師。７．梵学の新研究　南條博士。８．仏教国の新探検　能海寛。９．仏教徒の事業　能海寛。１０．本山政論　能海寛。

明治 21 年 10 月からスタートした、能海の新仏教徒運動は、世界平和を見据えての行動であった。能海寛の推し進めてきた『宗教学』の集大成は、あまりにも早すぎる他界によって完成を見ることができなかった。　　2017.7.28　(文責：隅田正三)